5/30
暑い日が続きます。5 月の終わりはやはりこの歌。五番で「五月やみ　蛍飛び交い。。。」

『夏は来ぬ』
作詞　佐佐木信綱、作曲小山作之助

卯の花の　匂う垣根に
時鳥（ホトトギス）　早も来鳴きて
忍音（しのびね）もらす　夏は来ぬ

さみだれの　そそぐ山田に
早乙女が　裳裾（もすそ）ぬらして
玉苗（たまなえ）植うる　夏は来ぬ

橘（タチバナ）の　薫る軒端（のきば）の
窓近く　蛍飛びかい
おこたり諫（いさ）むる　夏は来ぬ

楝（おうち）ちる　川べの宿の
門（かど）遠く　水鶏（クイナ）声して
夕月すずしき　夏は来ぬ

五月（さつき）やみ　蛍飛びかい
水鶏（クイナ）鳴き　卯の花咲きて
早苗（さなえ）植えわたす　夏は来ぬ

『蛍』　5/28
作詞　井上　赳　作曲　下総　皖一

蛍のたるのやどは　川ばた柳
柳おぼろに　夕やみ寄せて
川のめだかが　夢見る頃は
ほ　ほ　ほたるが　灯をともす

川風そよぐ　柳もそよぐ
そよぐ柳に　蛍がゆれて
山の三日月　かくれる頃は
ほ　ほ　ほたるが　飛んで出る

川原のおもは　五月のやみ夜
かなたこなたに　友よび集い
むれて蛍の　大まり小まり
ほ　ほ　ほたるが　飛んで行く

『わか葉 』　5/26
作詞：松永みやお作曲：平岡均之

あざやかな　みどりよ
あかるい　みどりよ
鳥居をつつみ
わら屋をかくし
かおる　かおる
若葉がかおる

さわやかな　みどりよ
ゆたかな　みどりよ
田畑をうずめ
野山をおおい
そよぐ　そよぐ
若葉がそよぐ

『あお葉わか葉に風かおりて』　5/26
(カトリック聖歌 352 番)

1　あお葉わか葉に　風かおりて

せせらぎに聞く　奇しき調べ
木かげに立てる　とわのみ母
みもとに行き　我ら憩わん

２　　わかくさ萌（も）ゆる　春の野辺（のべ）に
一本（ひともと）咲ける　その白百合
操（みさお）かぐわし　とわの処女（おとめ）
いざ称えなん　ひとの鑑（かがみ）と

３　　みくに慕いて　み名呼びつつ
雲雀（ひばり）あがれる　あおきみ空
高きこころの　とわの后（きさき）
あおぎまつり　称え歌わん

5 月も残り少なくなりました。蛍の季節は始まっているでしょうか？蛍の光な明滅ですが、最近になって明滅の速さが日本の西と東で違うということを知りました。東日本の蛍は約 4 秒に 1 回ですが、西日本の蛍はその 2 倍速くて、約 2 秒に 1 回発光しているそうです。おもしろいのは、その境界が富士川と糸魚川を結ぶいわゆるフォッサマグナ辺りだそうで、静岡県、長野県、新潟県などの蛍は中間の 3 秒くらいだということです。おそらく ATP の濃度がその周期で振動しているんでしょうが、その周期はどうやって決まっているのでしょうか？蛍というと源氏ボタル位しか知りませんでしたが、種類はたくさんあるんですね。蛍といえば、

『ほたるこい』　5/28
わらべうた（作詞作曲不詳）

ほう　ほう　ほたる　こい
あっちのみずは　にがいぞ
こっちのみずは　あまいぞ
ほう　ほう　ほたる　こい

先日「みかんの花咲く丘」をアップロードした後、カンボジア在住の姉からメールが来ました。姉は小さい頃から歌うのが大好きで「みかんの花咲く丘」はよく歌ったそうです。それと一緒に歌ったのが、「遠くの町」。メロディーはフランス古曲として紹介され

ていますが、原曲など詳細は不明のようです。同じメロディーで、「燃えろよ燃えろ」
「一日の終わり」もよく歌われますね。

『遠くの町』　5/23
作詞者不詳・小林純一訳詞・フランス古曲

1.
遠い山の向こうの　知らない町よ
いつか馬車に乗って　行きたい町よ

2.
飾り窓の店　あるという町
ポプラの並木の　あるという町

3.
遠い雲の下の　知らない町よ
楽しいことが　ありそうな町よ

『もえろよもえろ』　5/23
作詞者不詳・フランス民謡

もえろよ　もえろよ
炎よ　もえろ
火のこを　巻き上げ
天まで　こがせ

照らせよ　照らせよ
真昼の　ごとく
炎よ　うずまき
やみ夜を　照らせ

もえろよ　照らせよ
明るく　あつく
光と　熱との
もとなる　炎

『星かげさやかに』（一日の終わり）　5/23
作詞　不詳　作曲 フランス民謡

星かげさやかに　静かに更けぬ
集いのよろこび　歌うはうれし

名残りはつきねど　まどいは果てぬ
今日の一日（ひとひ）の幸
静かに思う

5/20
札幌に住んでいた頃、家族で石狩川河口近くまでドライブしたことがありました。そこで「こんなところに水芭蕉の花が咲いている」と驚いたことを覚えています。初めて水芭蕉を見たのは他ならぬ尾瀬、中学 2 年の時だったと思いますが、仲良し 4 人組？が、T 君のお兄さん(.山岳部)をリーダーとして尾瀬に出かけました。こういう旅行は初めてのこととて、重い荷物を背負って歩く練習をしたことを覚えています。なぜか肝心の尾瀬の記憶が朧げです。。。

『夏の思い出』
作詞：江間 章子、作曲：中田喜直

夏が来れば 思い出す
はるかな尾瀬 とおい空
きりの中に 浮びくる
やさしい影 野の小路
みず芭蕉の花が 咲いている
夢見て咲いている 水のほとり
しゃくなげ色にたそがれる
はるかな尾瀬 とおい空

夏が来れば 思い出す
はるかな尾瀬 野の旅よ
花の中に そよそよと

ゆれゆれる 浮き島よ
みず芭蕉の花が 匂っている
夢見て匂っている 水のほとり
まなこつぶれば なつかしい
はるかな尾瀬 とおい空

5/17
『下町の太陽』
作詞：横井 弘　 作曲：江口 浩司

下町の空に かがやく太陽は
よろこびと 悲しみ写す ガラス窓
心のいたむ その朝は
足音しみる 橋の上
あゝ太陽に 呼びかける

下町の恋を 育てた太陽は
縁日に 二人で分けた 丸いあめ
口さえきけず 別れては
祭りの午後の なつかしく
あゝ太陽に 涙ぐむ

下町の屋根を 温(ぬく)める太陽は
貧しくも 笑顔を消さぬ 母の顔
悩みを夢を うちあけて
路地にも幸(さち)の くるように
あゝ太陽と 今日もまた

5/14

1 週間前に米沢を訪れた時は丁度上杉祭が終わった頃でした。今は神田祭が開催中のようです。お祭りで思い出すのは幼い頃の「村祭」。写真は川崎市幸区幸町の 2 年前の町内会のお祭りです。

『村祭 むらまつり』
葛原しげる氏が作詞者として有力視されている。

村の鎮守の神様の
今日はめでたい御祭日
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
朝から聞こえる笛太鼓

年も豊年満作で
村は総出の大祭
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
夜までにぎわう宮の森

治まる御代に神様の
めぐみ仰ぐや村祭
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
聞いても心が勇み立つ

5/11
みかんは秋から冬の果物ですが、白い花は 5 月初旬から咲くそうです。1946 年 8 月 25 日、戦争が終って丁度 1 年。NHK のラジオ番組『空の劇場』が東京内幸町と静岡県伊東市を結ぶラジオの「二元放送」として放送されました。その番組でながれたのがみかんの花咲く丘、当時 12 歳の川田正子が歌って大流行した、ということです。戦争でうちひしがれた国民に元気と力を与えたそうです。自分も幼い頃よく聴いた覚えがあります。

『みかんの花咲く丘』
加藤省吾作詞・海沼実作曲

みかんの花が 咲いている
思い出の道 丘の道

はるかに見える　青い海
お船がとおく　霞(かす)んでる

黒い煙(けむり)を　はきながら
お船はどこへ　行くのでしょう
波に揺(ゆ)られて　島のかげ
汽笛がぼうと　鳴りました

何時か来た丘　母さんと
一緒(いっしょ)に眺(なが)めた　あの島よ
今日もひとりで　見ていると
やさしい母さん　思われる

春分から数えて 88 日目が八十八夜だそうで、今年は 5 月 2 日になります。八十八夜といえば、茶摘み:

『茶摘（ちゃつみ）』　　5/10
　日本伝統歌

夏も近づく八十八夜
野にも山にも若葉が茂る
あれに見えるは
茶摘ぢやないか
あかねだすきに菅（すげ）の笠

日和つづきの今日此の頃を、
心のどかに摘みつつ歌ふ
摘めよ　摘め摘め
摘まねばならぬ
摘まにや日本の茶にならぬ

GW 中の 3 日間を米沢で「春のフルート合宿」に参加しました。1 日目の夜は小野川温泉寿宝園。朝起きて窓を開けると、残雪を戴く山々と雪解け水を運ぶ川、川岸に並ぶ八重桜が青空の下に美しく映えていました。「雪が溶けて川となって山を下り谷を走る。。。」:

『おお牧場はみどり』
作詞・作曲：チェコスロバキア民謡

おおまきばはみどり
くさのうみかぜがふく
おおまきばはみどり
よくしげったものだ ホイ
ゆきがとけて かわとなって
やまをくだり たにをはしる
のをよこぎり はたをうるおし
よびかけるよ わたしに ホイ

おおきけうたのこえ
わこうどらがうたうのか
おおきけうたのこえ
はれたそらのもと ホイ
ゆきがとけて かわとなって
やまをくだり たにをはしる
のをよこぎり はたうるおし
よびかけるよ わたしに ホイ

もう一つの「こいのぼり」も載せておきます。

『こいのぼり』 5/3
近藤宮子 作詞　作曲 or 作曲者不詳

1.
やねより たかい こいのぼり
おおきい まごいは おとうさん
ちいさい ひごいは こどもたち
おもしろそうに およいでる

2.
みどりの　かぜに　さそわれて
ひらひら　はためく　ふきながし
くるくる　まわる　かざぐるま
おもしろそうに　およいでる

ちょっと早いですが、子供の日を前に街の所々に鯉のぼりが見られました。いい天気でしたが風がなく、あまり元気よく泳いでいるところを捉えられませんでした。「鯉のぼり」と「背比べ」。子供の頃、家のどこかの柱に兄弟の背の高さを毎年記した「柱のきず」があったのを思い出します。

『鯉のぼり』
作詞不詳　作曲　弘田龍太郎

1.
甍(いらか)の波と　雲の波
重なる波の　中空(なかぞら)を
橘(たちばな)かおる　朝風に
高く泳ぐや　鯉のぼり

2.
開ける広き　其の口に
舟をも呑(の)まん　様(さま)見えて
ゆたかに振(ふる)う　尾鰭(おひれ)には
物に動ぜぬ　姿あり

3.
百瀬(ももせ)の滝を　登りなば
忽(たちま)ち竜に　なりぬべき
わが身に似よや　男子(おのこご)と
空に躍るや　鯉のぼり

『背(せい)比べ』　　5/3
　作詞：海野　厚　　作曲：中山晋平

柱のきずは　おととしの
五月五日の　背くらべ
粽（ちまき）たべたべ　兄さんが
計ってくれた　背のたけ
きのうくらべりゃ　何（なん）のこと
やっと羽織の　紐（ひも）のたけ

柱に凭（もた）れりゃ　すぐ見える
遠いお山も　背くらべ
雲の上まで　顔だして
てんでに背伸（せのび）　していても
雪の帽子を　ぬいでさえ
ーはやっぱり　富士の山

5/2
5 月になりました。5 月といえばこの歌: シューマンの「美しき五月に」
はじめに原曲のドイツ語、次に堀内敬三の訳詞、そして意訳、そして英訳も。

"Im wunderschönen Monat Mai"
Heine の詩，作曲　R. Schumann

Im wunderschönen Monat Mai,
Als alle Knospen sprangen,
da ist in meinem Herzen
die Liebe aufgegangen.

Im wunderschönen Monat Mai,
alle Vögel sangen,
da hab' ich ihr gestanden
mein Sehnen und Verlangen.

堀内敬三　訳詞
美しき 5 月に

かがやく五がつの
はなみな咲くとき
わたしのむねも
おもいにもえる

かがやく五がつの
とりみなうたえば
わたしもきみに
おもいを告げた

(意訳)
美しの五月に

本当に美しい五月に、
つぼみはみんな飛び跳ねて、
私の心のなかで
愛が目覚める。

本当に美しい五月に、
鳥たちは歌いまわり、
そして私は君に私の希望と
憧れの全てを捧げます。

英訳
In the beautiful month of may
when all the buds burst open,
in my heart
love has risen

In the beautiful month of may
when all the birds sang
I confessed to her
my yearnings and desires